

氏 名	なが い か よ 永 井 佳 代
学位の種類	博 士 (文 学)
学位記番号	文 博 第 282 号
学位授与の日付	平 成 16 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 行 動 文 化 学 専 攻
学位論文題目	A Morphological Study of St. Lawrence Island Yupik : Three Topics on Referentiality (セント・ローレンス島ユピック語の形態論的研究—レファレンシャルティにかかわる3つのトピック)
論文調査委員	(主 査) 教 授 庄 垣 内 正 弘 教 授 田 窪 行 則 教 授 吉 田 和 彦

論 文 内 容 の 要 旨

本論文はアメリカ合衆国アラスカ州セント・ローレンス島において話されているシベリア・ユピック語（エスキモー・アリユート語族，話者数およそ1,000人）の形態論にかんして，とりわけレファレンシャルティにかかわる3つのトピックについて論じたものである。全6章からなり，構成は次の通りである。

第1章 導入

第2章 音韻論概観

第3章 形態論概観

第4章 指示詞について

第5章 指小辞・指大辞について

第6章 節の結合について：従属法動詞を用いた従属節と主節におけるコリファレンシャルティにかんする考察

第1章ではセント・ローレンス島のシベリア・ユピック語の話者数，地理的分布，先行研究などを概観し，本論文の目的，構成について述べた。

シベリア・ユピック語は話者数1,000人程度の「消滅の危機に瀕した」言語である。この言語は島の対岸にあたるロシア・チュコト半島においても話されているため，ロシア側でもアジア・エスキモー語，あるいはチャプリンスキー語として研究が進められてきた。アラスカ側でも，アラスカ先住民言語センターによる二言語教育のための文法書，辞書などが刊行されている。島民の言語や文化の継承にかんする意識も高く，多くのテキスト集が小さい言語ながら出版されている。本論文は，包括的な文法の記述を目指すものではなく，これまで先行研究であまり注意が払われてこなかったレファレンシャルティの問題について，指示代名詞，指小辞・指大辞について，また従属法動詞を用いた従属節と主節の，節の結合にみられるレファレンシャルティの問題に絞って考察を進める。第2章，第3章では議論の前提となる音韻論と形態論の概観を行い，そののち，この3つのトピックについて考察を行った。考察を進めるに当たっては，同系のアラスカ・ユピック語との比較対照しながら行っていく。アラスカ・ユピック語は，エスキモー語のユピック語派のなかでも，シベリア・ユピック語と近い関係にあり，詳細な記述がこれまでに行われているからである。

第2章では，音韻論の概観として，音素や音節構造を導入した後，形態音韻規則について論じた。シベリア・ユピック語の形態音韻規則は複雑であり，形態音素レベルと音素レベルでは全く異なった音連続があらわれうる。先行研究においては，Krauss (1975) で，音素レベルにおいて母音連続は同一2母音の連続しか許されないこと，逆に子音連続は同一2子音連続が許されず，必ず異なる子音の連続しか起きないという原理について言及がある。Jacobson (1990a, 2001) といった文法書は，接尾辞が付加されたときにどのような音韻規則が起こるのかについて接尾辞の初頭に様々な記号をつけて表し，実用面では非常に優れているといえる。しかしながら，なぜそのような音韻交替を示すのかについては触れていない。本論文では，形態音韻規則が，原則として音節構造の保持と音素配列上の制約に基づいていることを主張した。くわえて，修士論文

で扱った、ある種の音節構造をもつ語幹に接尾辞が付加される際に起こる母音の二重化について、その条件をさらに詳細に論じた。

第3章では、第4章以降の議論の前提となるシベリア・ユピック語の形態論を中心とした文法的特徴を概観した。シベリア・ユピック語は、一つの語に多くの形態素を含みうる複統合性の高い言語であり、語形成の手法としては接尾辞の付加が主たるものである。語類には名詞、動詞、小辞がみられ、名詞と動詞は語幹に任意の派生接尾辞と義務的な屈折接尾辞が付加されて形成される。名詞の屈折接尾辞には格と数、所有形であれば所有者の人称が標示され、動詞の屈折には法と自他、人称と数が標示される。特筆すべき文法特徴としては、能格性があげられる。格標示において能格性を示しているだけでなく、動詞の種類においても、自動詞の屈折をとる際と他動詞の屈折をとる際にS/Aの交替を示すものとS/Oの交替を示すものに分裂がみられる。また、第6章で詳述するように統語的能格性もみられる。

第4章ではレファレンシャルティにかかわる第一の問題として、指示詞について考察を行った。シベリア・ユピック語は、同系の他のエスキモー語同様に、非常に精緻な指示詞の体系を持つ。本章では、指示詞の中でも代名詞的指示詞について、とりわけ先行研究でこれまでほとんど扱われてこなかった、所有者人称を示す格語尾をとまう場合を中心とした考察をおこない、指示詞にあらわれる拡張辞 $-na$ と $-ku$ がある種の類別機能を狙っているのではないかという可能性を示した。

シベリア・ユピック語は23の指示詞語根をもつ。その各にアナフォラ標識の接頭辞が付加されうるので46通りの語幹が存在する。この指示語根から代名詞的指示詞と副詞的指示詞が形成される。

この言語では、代名詞的指示詞が所有者人称と数（所有者と被所有物の両方）を示す格語尾を伴う現象が高い頻度でみられる。これは同系のエスキモー語（アラスカ・ユピック語、イヌピアック語）にはみられない現象で、これまでほとんど扱われることがなかった。本稿ではこの所有者人称接辞を伴う代名詞的指示詞をあらわれる拡張辞（ $-na$ ：絶対格単数、 $-u$ ：絶対格以外の単数、 $-ku$ ：複数）によって分類し考察した。

拡張辞 $-na$ をもつ代名詞的指示詞語幹は、絶対格だけではなくすべての格の格語尾をとることが可能である。また、指示語根の表す意味によって制限される場合をのぞいて、所有者に1人称、2人称、3人称、再帰3人称のすべての人称があらわれうる。

絶対格以外で単数の形式を派生する拡張辞 $-u$ をもつ所有形の代名詞的指示詞にかんしては、所有形の屈折はみられない。おそらく、より一般的に用いられる非所有形の代名詞的指示詞では、 $-u$ と相補分布をなして絶対格しかとらない $-na$ が、所有者人称を伴う場合にはすべての格の格語尾をとることと関連していると思われる。

拡張辞 $-ku$ に所有者人称と数を表す格語尾が後続する例は、拡張辞 $-na$ の場合よりもテキストや日常会話であらわれる頻度も少なく、生産性にも制限があるようである。また、拡張辞 $-ku$ をとりうる指示語根にも制限があるように思われる。

拡張辞 $-na$ 、 $-ku$ が標示する数を、それがあらわれる代名詞的指示詞がとる格語尾の標示する数に対する補助として捉えている先行研究もあるが、拡張辞と格語尾それぞれが標示する数は必ずしも一致しない。このことから、拡張辞 $-na$ 、 $-ku$ には、数の標示とは異なる機能の存在が予想される。

拡張辞 $-ku$ をもつ代名詞的指示詞の場合、その数が単数であれ複数であれ、指示対象は複数からなる均質の集合体に帰属していると仮定することができる。

拡張辞 $-na$ が複数を表す格語尾と共に起する場合、その代名詞的指示詞は複数を形成する要素の均質性は問われないようである。

以上から、複数をとる場合に、拡張辞の、 $-ku$ は複数をなしている要素の均一性を、 $-na$ は複数をなしている要素がどのようなものであってもよいことを示しているように思われる。これらは二次的な数の標示というよりもむしろ類別機能を担っていると考えられるかもしれない。

第5章は、指小辞・指大辞について、それらが動詞に付加された際に、何を指示しているのかということについて考察した。シベリア・ユピック語には、指小辞・指大辞に2種類のタイプがみえる。ひとつは語幹修飾タイプ、もう一つは意味的に語幹ではなく、語幹に関連する名詞項を「修飾」する名詞項修飾タイプである。名詞項修飾タイプは同系諸言語にもみられ、また、隣接するチュクチ・カムチャツカ語族でもみられる。本章では、主として名詞項修飾タイプの指小辞・指大辞について考察した。

はじめに、語幹修飾タイプと名詞項修飾タイプについて概観した。語幹修飾タイプは、名詞語幹に付加される場合、通常の派生接尾辞同様にその語幹の表すものの大小を表し、動詞語幹に付加される場合には、動詞語幹の表す動作・状態にかかわる時間の長さや動作の程度を表す。名詞項修飾タイプは、名詞語幹に付加された場合、語幹修飾タイプ同様に名詞語幹の表すものの大小を表す。名詞項修飾タイプが名詞語幹に付加される際に注目すべき特徴は、指小・指大性が向けられている名詞を修飾する関係にある数詞、指示代名詞などにもこれらの接尾辞が付加されることである。

自動詞の中に名詞項修飾タイプがあらわれる場合、名詞項修飾タイプの接尾辞が修飾するのは、主語の名詞項である。他動詞の中に名詞項修飾タイプがあらわれる場合、主語の項を指す場合と、目的語の項を指す場合の2通りの読み方が可能である。実際の発話では、指されている方の名詞項に同じ指小辞あるいは指大辞を付加することが一般的なので曖昧さが生じることが少ない。しかしながら、どちらの名詞項を修飾しているのかに2通りの解釈はなく、名詞項修飾タイプによって修飾される名詞項はどちらか一方の名詞項に決まっている例もある。その決定には名詞項の人称が関与している。3人称の名詞項は動詞に含まれる指小辞・指大辞によって修飾されやすい傾向がある。このことは、これらの指小辞・指大辞が、それらが付されたものに対する話者の態度や評価といったものを表していることに関連していると思われる。名詞項修飾タイプのいくつかは、話者の対象物への評価をあらわにするので、直接的な表現を避けるために、とりわけ2人称に対して用いられることが少ないと考えられる。ただし、文脈を与えることによって、2人称に指小辞・指大辞が向けられる形も容認される。以上から名詞項修飾タイプが他動詞に含まれる場合には、主語と目的語がどちらも3人称である場合、どちらも指小辞によって修飾されることが可能であるが、主語と目的語のどちらか一方のみが3人称である場合には、3人称の名詞項が修飾される傾向にあるといえる。次に、語幹修飾タイプとして生産的である指小辞が限られた範囲ではあるが、名詞項修飾タイプとして用いられる場合について考察し、その後、指小辞・指大辞以外の名詞項修飾タイプの接尾辞について概観した。これらの接尾辞は主として、話者のその接尾辞が修飾する名詞項に対する評価や態度を表しているものである。この種の接尾辞が動詞に付加される場合、修飾される名詞項は常に自動詞主語、他動詞も主語の名詞項である。この接尾辞は同系のアラスカ・ユピック語にもみられる。地域類型論的観点からみると、隣接するチュクチ・カムチャツカ語族のコリヤーク語では、名詞項修飾タイプの接尾辞が動詞に付加された場合、自動詞であれば主語、他動詞であれば目的語を修飾する。アラスカ・ユピック語においては、自動詞であっても他動詞であっても必ず主語の名詞項を修飾する。このことから、シベリア・ユピック語は位置的にもこの二つの言語の間に位置するが、名詞項修飾タイプの指小辞・指大辞のふるまいにおいても二つの言語の中間にあるといえるであろう。

第6章では、従属法動詞を用いた従属節（以下従属節）と主節の主語は必ず一致しなくてはならないと先行研究において主張されてきたが、実際には必ずしも当てはまらない。この章ではまず、主節と従属節の主語が異なる場合に、従属節にどのような動詞があらわれるのかについて考察した。従属法の動詞には他の法の動詞とは異なり、関与する名詞項を1項しか標示しないという特性がある。このため、自動詞であれば主語、他動詞であれば目的語を標示し、名詞項が3人称である場合に、再帰3人称の形式があらわれれば、自動詞主語、3人称の形式があらわれれば他動詞目的語を標示していると主張されてきた。しかし、ある種の一項動詞語幹（自動詞）が従属節に用いられる場合、再帰ではない3人称が標示され、その主語は主節のそれとは異なりうることを確認された。それらの動詞語幹は、(1)「～である」という出名動詞、(2)「～にいる・ある」を表す出名動詞、(3)形容詞・副詞的動詞語幹、(4)「状態化」の接尾辞がついた動詞語幹、(5)「～をもつ」を表す出名動詞、(6)否定や欠如を表す接尾辞が付加された語幹である。これらの動詞語幹は共通の特性として、動作というよりもむしろ状態を表す動詞語幹ということができる。

この他にも、接尾辞-umaと-ngが従属節にあらわれる場合、主節と従属節の主語が異なっているのが頻繁に観察される。後者の接尾辞にかんしては先行研究で適切に扱われたことがなかった。これらの接尾辞は動詞語幹に制限なく、他動詞の屈折をとりうる二項動詞語幹にも付加され、自動詞として従属節にあらわれる。これらの接尾辞が表す意味特徴としては、それぞれ、動作の完了／結果、動作の進行を表している。先に見た6つの動詞のタイプとの共通点は、動詞の表す動作や状態にかかわる継続性であるといえよう。これらの接尾辞が本来S/Aの交替を示す二項動詞語幹に付加されて自動詞としてあらわれる際には、他動詞の主語をそのまま主語とする(S/A)場合と、他動詞の目的語を主語とする(S/O)タイプの二つの派生を示す。このS/Oの派生を示すものは、本来シベリア・ユピック語が能格言語であるため、他動詞目的語（絶対格）

から自動詞主語（絶対格）への交替に格の変転を伴わないが、類型論的観点からみて受動と言ってもよいだろう。

主節と従属節の主語が一致していない場合、従属節に使役接尾辞を付加して、意味的には使役の意味を持たないけれども上位の行為者の項を増やし、統語的には主節の主語が従属節の主語である形式にするという現象がみられる。この現象は同系のアラスカ・ユピック語で生産的に用いられている。先行研究では、先に見た-umaがあらわれる場合とこの使役による主語の一般化を格のあらわれが同一であるため、同じ現象として扱っているが、実際には、先に示したように-umaがあらわれる場合の従属節は自動詞であり、使役接尾辞があらわれる場合は他動詞であるといった違いを本章では明確に示した。

この章の最後で、主節と従属節の結合における能格性、すなわち統語的能格性について考察した。従属節が自動詞である場合に限りみると、主節と従属節の結合にはS/Oの名詞項をpivotとする節の結合がみられ、S/Aの名詞項をpivotとする際には、形態的にも有標である3人称再帰の形式がみられる。すなわち、S/Oの統語的能格性が無標であり、S/Aの統語的な対格性があらわれる際には形態的にも有標の再帰3人称が用いられる。

本論文末に付録としてテキストとその形態素分析を付した。テキストは1995年から翌年にかけて収集した14編で、Nagai and Waghiyi (2001) として出版したものの後半部である。

論文審査の結果の要旨

本論文はエスキモー・アリュート語族に所属し、アメリカ合衆国アラスカ州セント・ローレンス島において話されているシベリア・ユピック語の形態論、とりわけレファレンシャルティ（指示性）にかかわる3つのトピックについて論じたものである。6章より構成されており、4章から6章まで、すなわち「指示代名詞」「指小辞・指大辞」そして「従属法動詞を用いた従属節と主節の結合」が本論である。1章から3章は導入部にあたいる。論文末には付録としてテキストとその形態素分析が付されている。

第1章ではセント・ローレンス島シベリア・ユピック語の使用状況、地理的分布、文法にかんする先行研究などを概観し、本論分の目的、構成について述べた。

第2章では、音韻論の概観として、音素や音節構造、さらに形態音韻について論じた。とくにこれまで詳細な記述の無かった複雑な形態音韻規則について、論者はこの規則が原則として音節構造の保持と音素配列上の制約に基づいて成立していると主張する。

第3章では、4章以降の本論に先だってシベリア・ユピック語の形態論を中心とした文法的特徴を概観している。

本論第4章では指示詞について考察を行っている。この言語は、同系諸語一般にみられるように、非常に複雑な指示詞体系を持つ。本章では、人称所有表現の格語尾をとまう代名詞的指示詞について論じた。

拡張辞-naをもつ代名詞的指示語幹は、所有形であらわれるときには絶対格だけでなくすべての格の格語尾をとることが可能である。また、指示詞語根の表す意味によって制限される場合をのぞけば、所有者に1人称、2人称、3人称、再帰3人称のすべての人称があらわれうる。また-naが複数を表す格語尾と共に起する場合、その代名詞的指示詞は複数を形成する要素の均質性は問われない。一方、拡張辞-kuをもつ代名詞的指示詞の場合、その数が単数であれ複数であれ、指示対象は複数からなる均質の集合体に帰属していると仮定することができる。これらは二次的な数の標示というよりもむしろ類別機能を担っていると論者は主張する。

本論第5章は、指小辞・指大辞について考察している。この言語では指小辞・指大辞に2種類のタイプがみられる。ひとつは語幹修飾タイプ、もう一つは動詞語幹に付加された場合に、その語幹に関連する名詞項を「修飾」する名詞項修飾タイプである。名詞項修飾タイプは同系他言語にもみられ、また、隣接するチュクチ・カムチャツカ語族にもみられる。

自動詞の中に名詞項修飾タイプの接尾辞があらわれる場合、それが修飾するのは、主語の名詞項である。一方、他動詞の中にこのタイプがあらわれる場合、主語の項を指す場合と、目的語の項を指す場合の2通りの読み方が可能である。どちらの名詞項が修飾されるかという決定には名詞項の人称が関与している。3人称の名詞項は動詞に含まれる指小辞・指大辞によって修飾されやすい傾向がある。主語と目的語がいずれも3人称であるなら、いずれもが指小辞・指大辞によって修飾されることが可能であるが、主語と目的語のどちらか一方のみが3人称である場合には、3人称の名詞項が修飾される傾向にあるといえる。

地域類型論的観点からみると、チュクチ・カムチャツカ語族のコリャーク語では、名詞項修飾タイプの接尾辞が動詞に付加された場合、自動詞であれば主語、他動詞であれば目的語を修飾する。アラスカ・ユピック語においては、自動詞・他動詞ともに主語の名詞項を修飾する。このことから、シベリア・ユピック語は地理的分布にもこの二つの言語の間に位置するが、名詞項修飾タイプの接尾辞のふるまいにおいても二つの言語の間にあるといえるであろう。

第6章では、従属法動詞を用いた従属節（以下従属節）と主節の名詞項の関係をあつかっている。これまでシベリア・ユピック語では従属節と主節の主語は必ず一致するものと主張されてきたが、少なくともセント・ローレンス島ではこのような主張は成り立たない。主節と従属節の主語が異なる場合に、従属節にどのような動詞があらわれるのかについて考察した。従属法の動詞には他の法の動詞とは異なり、関与する名詞項を1項しか標示しないという特性がある。そして自動詞であれば主語、他動詞であれば目的語を標示し、名詞項が3人称である場合に、再帰3人称の形式があらわれれば、自動詞主語、3人称の形式があらわれれば他動詞目的語を標示していると従来主張されてきた。しかし、特定できる6種の一項動詞語幹（自動詞）が従属節に用いられる場合、主語として再帰ではない3人称が標示され、主節の主語とは異なりうることを確認した。これらの動詞語幹は共通の特性として、動作というよりもむしろ状態を表す動詞語幹であるといえることができる。

この他にも、接尾辞-umaと-uが従属節にあらわれる場合、主節と従属節の主語が異なる事例が頻繁に観察される。これらの接尾辞は動詞語幹の種類に制限なく、自動詞化して従属節にあらわれる。また、これらの接尾辞が表す意味特徴としては、それぞれ、動作の完了／結果、動作の進行を表している。先に述べた6種の動詞のタイプとの共通点は、動詞の表す動作や状態にかかわる継続性の表示であるといえる。

シベリア・ユピック語は話者数、千人程度の危機に瀕した言語である。アジア大陸とセント・ローレンス島に分布し、大陸側の研究は若干のものがみられるが、セント・ローレンス島の研究は論者のものをのぞいてほとんどなされていない。論者は十数回の現地調査に基づいて上記内容を完成させた。第2章の形態音韻の記述や第6章の従属節にかんする記述には枠組みの不確かさが認められるし、文章の難点もある。しかし、論者の主張は基本的に容認できるものであり、記述内容がエスキモー語研究に貢献するところは極めて大きい。今後、本論文がこの方面の研究に利用されることも確かである。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2004年2月26日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。